



No.73 2020.8.28

明石市コミュニティ・スクールだより  
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

# コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

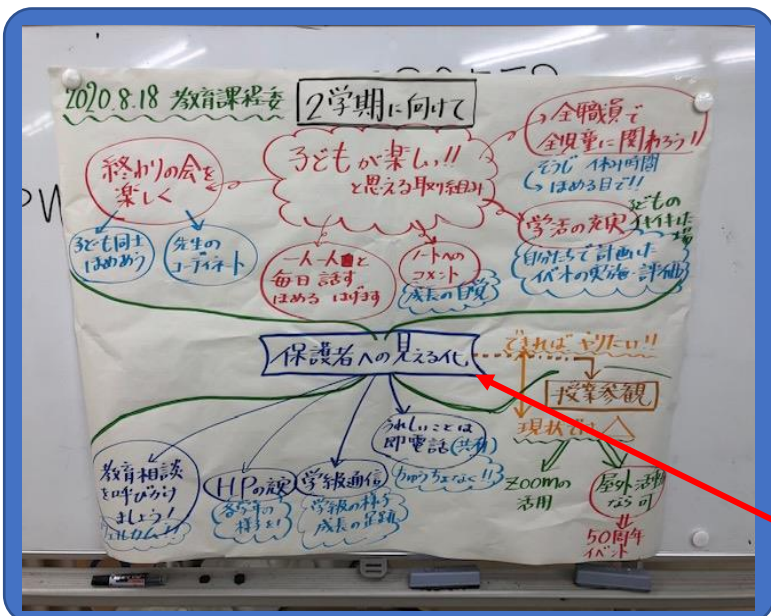
明石市教育委員会事務局学校教育課

## 朝霧小コミュニティ・スクール Zoom 体験会 見える化への一歩？



8月21日に朝霧小コミュニティ・スクールでZoom体験会が開催されました。このZoom体験会は2部制で、第1部はインストールから、第2部は会議を体験といった流れで行われました。第1部ではみなさんスマートフォンを持ってこられ、スマートフォンをコミセンのWifiに接続することから始めました。Zoomアプリのダウンロード・インストールと進み、いよいよ

Zoom会議室のミーティングIDとパスワードを入力し順調に会議室に入ることができました。参加者の皆さんにとって一番難しかったのはIDコードを入力する時にアルファベットの大文字と小文字に分けて入力することだったようです。参加された方からは、「Zoomで打ち合わせをするので、使えたら参加して」というお誘いはあったけど、「家で一人ですると、間違ってへんなところにいきそうで怖いから使わなかった」といった感想をいただく中で、シニア層にとってもオンラインでのつながりの場が広がっていることを改めて感じました。参加された方から「今度は会を開く方法を」というリクエストをいただき、今度は「主催の仕方」を体験していただくことになりました。近いうちに子どもたちがこうした体験会の講師となる日がやってくればいいなと思ったりしながら、中学2年生でのトライやる・ウィークも職業体験というものから、こうした教室等の企画開催といった起業的な側面がでてきても面白いだろうなと妄想が広がりました。



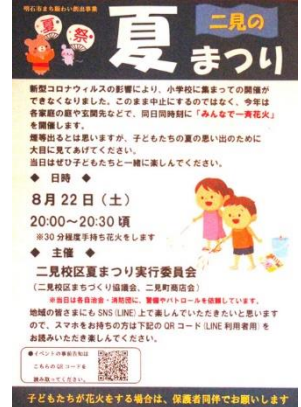
第2部は会議室につないでオンラインでの対話を体験するというものでしたが、こちらには朝霧小の先生方もたくさん参加いただき、参加された保護者の方は逆にびっくりされたのではと思います。Zoomの基本的な操作方法やブレイクアウトルームに分かれてのミニ対話といったものでしたが、朝霧の先生方がこれからオンラインをどんな風に使うか楽しみになってきました。そんな先生方の関心の高さは教育課程委員会の議論の中で出てきた「保護者への見える化」

というキーワードにつながっているのではと思いました。

こうした対話が校内で始まり、話し合った内容が見える化されることで校内でのゴールが共有され、教職員の協働が始まっているのではと感じました。「社会に開く」というイメージが共有され始めているのかもしれない。

## 二見小校区発 “新しい生活様式” に沿った夏祭り”

二見小校区では2017年よりまちづくり協議会さんや二見町商店会さんが中心になり実行委員会をつくり、「二見の夏まつり」を開催し、その中で、大人が花火師役となり、多彩な花火の演出で子どもたちも楽しみにしていた行事でしたが、今年は新型コロナウイルスの影響で開催を中止という声も出る中、「子どもの笑顔が見たい。何かできることはないだろうか」と代替策を模索する動きが生まれてきたそうです。その中で議論を重ね、各家庭で花火を楽しむ様子を無料通信アプリ「LINE」(ライン)に投稿し、祭りの感動をオンラインで共有しようという“「新しい生活様式」に沿った夏祭り”を考えだされました。



22日の午後8時からあらかじめ校区内の小学生以下の子どもに配布された市販の手持ち花火を、各家庭で楽しむ様子を専用のLINEに動画や写真を投稿し交流し合っただけで済んだようです。一大プロジェクトを成功させたのは、実行委のメンバーの方が地域の中で培われてきた人間関係をベースにコミュニケーションをとり対話を重ねながら課題を解決していく二見の地域の中で培われてきた力があつたからなんだろうなと思います。こうしたプロジェクトを地域で企画・計画・実施できる姿を子どもたちは身近に感じる中でふるさと二見への愛着が体にしみ込んでいくんだらうなと思います。

こうしたプロジェクトに小学生や中学生も参加できたらプロジェクト自体が子どもたちにとって生きた学びの場となっていくんだらうなと思います。これからの時代に必要な資質・能力はこうしたクリエイティブな場で育まれていくと考えます。そうした新しい学びと育ちに仕組みを創っていくのがコミュニティ・スクールだと考えています。二見小校区にはそうした人を育て、人がつながる仕組みが受け継がれており、それをいかに進化(深化)させていくのが二見小コミュニティ・スクールの役割なのかなと考えます。それぞれの校区の個性がでたコミュニティ・スクールがデザインできたら面白いなと思っています。



また、この夏祭りでチャレンジされたLineの活用は新たな活用を考えるきっかけになるのではと思います。私自身にはまだLineには正直なところ抵抗があり、食わず嫌いな面が強いと思っています。また私と同じような方もまだ多いかなと思ったりします。しかし、コロナ禍の中での参観や音楽会、図工展考える上、もまさしく「新しい生活様式」に沿ったものを考えるヒントではと思います。

また、二見の実行委員のメンバーがプロジェクトを遂行する中で大切にしたい“対話”が学校づくりの中でますます重要になってくると考えます。

【参考 神戸新聞 二見小HP まちなび明石 (<https://a-machi.jp/futami/>)】

(文責:北本)